

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520500

研究課題名(和文) 談話における方言の変容 - 共通語には変化しない方言に注目して -

研究課題名(英文) Change of dialect in discourse-specially change to non-common language-

研究代表者

杉村 孝夫 (TAKAO, SUGIMURA)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60083234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：2009-2011年度、大分県各地の言語生活の変容を探った研究の成果を踏まえ、2012-2014年度(本事業)では、福岡県3地点、大阪市東区、東京都区内、青森県津軽地域の各地で同様の会話を収録し、約60年前のNHK『全国方言資料』と比較し、方言の変容、特に共通語とは異なる方向への変容に注目して実態を解明し、要因を考察した。

隣接優勢方言への変化、方言内部での自律的变化の他、臨時的バリエーションが多く観察される。これは言語変容に関する、注目すべき要素であることを改めて認識した。

研究成果の概要(英文)：On the basis the results of the study on Discourse in Oita district Dialect,2009-2011 3 years, continued 2012-2014 3 years,We investigated discourse of Fukuoka district dialect,Osaka district dialect,Tokyo district dialect,Aomori-tsugaru district dialect. And compared before 60 years these district dialect's discourse,collected by NHK. We researched dialect change,specially dialect change to non-common language.

Often the District dialect change to the Neighbor powerful dialect,and often change itself another forms or meanings.New knowledge is following,temporariness various forms are founded.These are sign of language change.

研究分野：方言学

キーワード：方言 変容 談話 非共通語化 経年変化

1. 研究開始当初の背景

戦後の混乱期から抜け出し、復興が一息ついた1952年、NHKは、全国各地の伝統方言を記録・保存すべく全国都道府県の方言談話の収録を開始した。20年かけて北海道から沖縄まで141地点の自由会話と各場面のあいさつの収録を行った。この2年後、1954年からは大分県でNHK大分放送局と大分大学松田正義・糸井寛一の共同による、同様の方言談話の収録が行われた。5年かけて大分県内外32地点の収録・文字化が行われた。収録談話の一部と解説をラジオで放送することにより方言と標準語に対する認識を深めるとともに大分県における国語教育への応用も目指していた。

その後、国立国語研究所の全国主要地点における『方言談話資料』、文化庁の全国都道府県における各地方言緊急調査保存事業により膨大な方言談話の収録と一部の文字化が行われた(『日本のふるさとことば集成』として 部公刊)。

一方で、世界的な言語の消滅、国内では方言の消滅の危機に直面し、各地方言の調査・記録保存が行われており、例えば、沖縄県の宮古市(旧平良市)西原方言の電子図書館での公開など様々な成果があらわれている。

このような背景のもと、本研究の研究組織のメンバー4名は、大分県の1次1954-58、2次1983-85の方言談話の収録について3次2009-11の収録を行い、大分県における言語生活50年の変容を研究した(科学研究費助成事業研究成果報告書、課題番号17101、研究課題名:言語生活50年の変容-大分県方言談話資料を比較して-参照)。

本研究は、この成果を踏まえて行われた。

方言の談話の記録保存は古くから行われてきたが、場面を設定しての談話の収録は多くはない。NHK『全国方言資料』、大分県における『方言生活30年の変容』国語研『方言談話資料』などでは場面設定の談話を収録してきた。本研究は、この流れを発展させたものである。東日本大震災による地域社会の崩壊で消滅の危機に瀕した方言の記録保存のために生活場面に即した方言談話の収録も行われ始めた(東北大学方言研究センター2014・2015『生活を伝える被災地方言会話集1・2』)今後、場面設定の方言談話の収録・研究方法についての議論がますますさかんになると考えられる。

2. 研究の目的

談話における方言変容の実態解明と要因の考察が本研究の目的である。大分県方言談話における変容研究の成果を踏まえ、方言の変容が共通語化ばかりでなく、隣接優勢方言への交替、方言独自の内的要因による変容の力が勝り、共通語とは違う方向

へと変化することもこれまで指摘され、研究報告も行われてきた。そのような変容に注目して方言変容の実態を解明し、要因を考察することが本研究の目的である。その際、言語を構成する要素である、音声、形態、文法、語彙、表現のみならず、談話の構成要素やその組み合わせ、談話の構造といったより大きな枠組みで方言の変容を捉える。

3. 研究の方法

本土方言を代表する九州、関西、関東、東北の4地域において、自由会話及び場面設定の会話を、高年層、青年層、少年層の男女1組にしてもらい、PCMレコーダー、及びデジタルビデオレコーダーで記録した。マイクロフォンはピンマイクを使用し、話し手以外の音声は極力入らないように、また、話し手の音声はそれぞれ一定の音量で入力されるように録音環境を設定した。もちろん、周囲の音環境にも注意する。話し手には同年代の親しい人同士で会話をしてもらい、ということだけを依頼し、内容については収録の場所で簡単な打ち合わせだけを行い、即興で話してもらった。

場面設定の会話は1.朝(近所に何かを借り(伝え)に行く)2.夜(訪問していた近所の家を辞する)3.道で(道でばったり出会っての立ち話)4.買い物(近所(の店)に何か買いに行く)(少年は以上1-4の場面)5.出がけ(夫が旅行に行く、妻が見送る)6.帰宅(夫が旅行から帰り、妻が迎える)(青年は以上1-6の場面)7.祝儀(出産・新築などのお祝い言う)8.不祝儀(近所の家の不幸にお悔やみ言う)9.自由会話(その土地らしい話題で自由に語る。全員)

それぞれの場面は1-2分程度(自由会話の場合は2-3分も可)を収録した。少年の談話は簡略で2-30秒ほどで終わってしまうので長くなるよう工夫して収録しなおす場合が多かった。これは研究結果に影響している可能性がある。

収録した談話を文字起こしして、1段目には音声をカタカナ表記で、2段目には漢字かな混じりで共通語訳を施し、必要に応じて語句や表現、音声上の特徴などを脚注で示した。こうして出来上がった文字化資料を対象として世代差や経年差を比較し、談話における方言の変容を研究した。

4. 研究成果

(1)本研究の基礎となり、また、調査地域拡大の基となった2009-2011年度の大分県内13地点における方言談話の収録分析、(現時点からだと)30年前、60年前の「大分県方言の旅」の資料との経年比較について、本研究の段階に入って明らかになったことがある。

大分県方言 60 年の 3 世代経年資料により、依頼談話の世代差・経年変化を考察した結果、次の 2 点の結論を得た。

少年(未成人)と青年・高年層(成人)の依頼の方略の違いは談話の構造によって捉えることができる。未成年の依頼の方略は、直接的で簡略であるのに対して、成人のそれは、状況に配慮し、依頼実現の必要条件を整えたいうでなされる。成人の方略は経験を重ねることによって習得していくものであることがわかる。

60 年の経過によっても談話の構造から見た方略には大差はない。ただし、談話の最小の構成要素である「機能要素」(ポリ-ザトラウスキ-2009、柳慧政 2012 参照)の現れ方、その組み合わせである「ユニット」(杉村孝夫 2014)の現れ方には地域差が見られる(小林隆・澤村美幸 2014『ものいいかた西・東』岩波新書参照)。

「発話機能」とは、依頼者と被依頼者の相互行為における依頼にかかわる働きかけ、個々の発話の機能である。ひとつのターンが複数の発話機能の連続からなることもあれば、ひとつの発話が二重の発話機能を持っていることもある。例えば、情報提供+依頼、謝辞+収束など、あるいは侘び(気遣い)(ホントニ スマンコトヤ)が受諾(相手の申し出を許可する)を含意したり、自己の行為表示(アツカドーカ サガシテクルヨ)が受諾(貸借依頼の受け入れ)を含意したりすることもある。

3 世代 3 次の大分県方言談話(朝の場面) 89 場面、九州・関西・関東・東北の 3 世代 37 場面合計 126 場面に見られた発話機能は次のとおり。

依頼 依頼補強 受諾 依頼予告 先行発話 依頼確認 受諾確認 謝辞 謝意(侘び・気配り) 返却約束 返却要求 収束 補償 行為要求 確認要求
この他、間接的発話機能として 情報提供 情報要求 がある。具体的な事情説明や事情質問は情報のやり取りと捉えることができる。さらに、直接依頼の働きかけには関与しない、むしろ一時依頼の相互作用から外れる発話連続に 話題 がある。話題には参加者が興味を持っている内容(例えば、農家であれば作物の出来具合、中学生であれば、野球選手や文化祭の準備のこと)が現れる。しかし、一見依頼行為を阻害するように見えて 話題 の終了後に 受諾 依頼確認 などの発話機能が現われ、依頼 が促進されることもある。(話題)も依頼談話の重要な構成要素である。

「ユニット」とは、相手の働きかけとそれに対する応答を連続性のあるひとまとまりと捉えたもの。一対だけでなく、さら

に連続する場合もあれば、一旦切れて新たな働きかけが始まり、新しいユニットを形成する場合もある。前後の切断と内部の連続によって、談話全体をいくつかの単位に分割することができる。このより緊密な単位をユニットと呼ぶ。「先行発話ユニット」「依頼ユニット」などがある。

前述の結論 の根拠を示す。

未成年である少年層の談話には(受諾)の明示のないものが見立つ。1 次では 1/5、2 次では 2/10、3 次では 1/13 で、合計 4/28、14%に見られる。成人では見られない。(受諾)の明示がなくても依頼-受諾の相互作用は成立している。

大分県以外では、これまでの収録地点のうち、青森県黒石市の高年層に見られた。依頼予告 だけで受諾応答行為表明があるが、受諾自体の表明はない。

後掲 4 頁資料参照。

少年層ではなかなか受諾が行われない。本題開始後 依頼 から 受諾 までのターン数(平均)を世代別、収録年次別に整理したものが表 1 である。

表 1 受諾までのターン数

| 受諾までのターン数 | 1 次 | 2 次 | 3 次 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 高年 | 1.3 | 2.9 | 1.5 |
| 青年 | 6.2 | 1.9 | 2.8 |
| 少年 | 4.3 | 5.3 | 4.3 |

1 次青年層の例外的長さ(親しい青年どうしの談話で、(話題)をはさんでやりとりが長く続くことがある)を除くと、少年層では受諾までのターン数がどの収録年でも概ね長い。その理由は、いきなり、あるいは簡単すぎる 情報提供 の後すぐ 依頼の発話を行うため、依頼の内容が曖昧なため相手の 情報要求 が続いたり、遠慮のない 否定応答 の反応が続くためである。では、少年層では(依頼)のターンは本題開始後早く現れるのかということ、そうでもない。平均値で表したものが表 2 である。1 次、2 次では少年層が比較的早いのが 3 次ではかえって遅い。

但し、依頼開始が早いと受諾が遅く、依頼開始が遅いと、受諾が早いという傾向が見られた。

表 2

| 依頼開始ターン番号 | 1 次 | 2 次 | 3 次 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 高年 | 2.8 | 3 | 1.6 |
| 青年 | 1.8 | 3.7 | 1.9 |
| 少年 | 1.2 | 2.1 | 3.5 |

ユニットの種類・組み合わせの数の世代差・経年変化の考察

表3

| 次 | ユニットの種類 | | | ユニットの組み合わせ | | |
|---|---------|----|----|------------|----|----|
| | 高年 | 青年 | 少年 | 高年 | 青年 | 少年 |
| 1 | 4 | 4 | 5 | 8 | 9 | 8 |
| 2 | 7 | 6 | 5 | 16 | 12 | 13 |
| 3 | 9 | 7 | 8 | 19 | 16 | 17 |

ユニットの数、ユニットの組み合わせの数の年代差・経年差を表示したものが表3である。ユニットの種類は各世代での差はあまりない。組み合わせの数は収録年が後になるに従って増えるように見える。但し資料の場面数も増えているので大差はない。各収録年の場面数を分母にして比率を計算し直してみると、各世代、各収録年とも0.8から1.9の間に収まっている。

2012-2014年度調査・収録の九州(福岡県)関西(大阪市)関東(東京都、山手を中心に)東北(青森県津軽地方)で本題開始後依頼発話が見れるターン番号、依頼から受諾までのターン数を見ると、どの地点、どの世代も比較的早く依頼発話を行い、またすぐに受諾している。ターン数の多い談話には否定応答があったり、先行発話に対するやり取りなど個別の状況があるためである。

本題開始後の依頼発話**ターン番号** 依頼から受諾までの**ターン数**は以下のとおり。依頼でない、報告などの内容の場合も該当なし(-)として記した。

うきは市高年(交通整理当番) 2 +1
 うきは市青年(収蔵庫の鍵貸借) 2 +1
 うきは市少年 前日の戸締まり確認 - -
 福岡市高年(定例会日程変更知らせ) - -
 福岡市青年(自転車ポンプ貸借) 4 +3*
 5(依頼2) +1

*先行発話に対する応答とその継続により依頼発話の出現が遅くなった。

福岡市少年(社会のノート貸借) 3 +1
 豊前市高年(ランドゴルフ出場) 1 +5*

*否定応答、依頼補強を経て受諾したためターン数が多い。

豊前市青年(体育祭出場) 3 +7*

*否定応答、依頼補強2回を経て5つめで受諾保留のターン、受諾は7つめである。

豊前市少年 忘れ物(宿題)届け - -

東京都高年 地震被害報告 - -

東京都青年(空気入れ貸借) 6 +3*

*相槌をターンと数えたため、6になった。

相槌を発話中の挿入と見れば、依頼発話は2番目である。

東京都少年(自転車ポンプ貸借) 2 +1

大阪市高年 敬老の日記念品配布 - -

大阪市青年(旅行かばん貸借) 2 +3*

大阪市少年(DVD貸借) 1 +1

黒石市高年(雪掻きスコップ貸借) 3+1

*天候の話題は依頼の暗示(伏線)

依頼予告だけ、情報提供・受諾応答行為表明だけで、直接の依頼発話、受諾の表明はない。

黒石市青年(教科書貸借) 1 +1

黒石市少年(学習ソフト貸借) 1 +1*

*依頼発話ではなく、(依頼予告)のみで(受諾)している。3(依頼発話) +1

(2) 臨時的バリエーション

言語変化のモデルは、地域社会の成員の一人がこれまでにない新しい意味・形態を使用し始め、それが成員間に広がり、やがて安定的に多数を占めるようになると変化が完了するというものである。変化の方向は外的変化、共通語や他の方言へと変わる場合と、その方言の内的要因、即ちドリフト(駆流)により独自のものへと変化する場合があります。が本研究の注目する「共通語には変わらない変化」である。の具体例として大分県姫島村方言の「シスカニ」(静かに)をあげる。共通語との対応でみるとザ行子音の無声化である。「ヤカマシカローガ アラー シスカニ サセッカー」(29歳男性、帰宅(青年)1983年収録東国東郡姫島村、松田・日高1993下p.62)。この方言本来の歴史的祖形は「シツカニ」であり、ダ行の「ツ」が無声化してサ行の「ス」になったもの。四つ仮名対立の痕跡である。の具体例としては完了相のアスペクトを表す「チョー」をあげる。元来の形態は「チョル」であるが、隣接(福岡)方言の影響で「ル」が長音化して「チョー」となった。(例)ンマー イチオー シチョーケド(15歳女性、朝(少年)1984年収録直入郡直入町長湯、松田・日高1993下p.241)

収録から30年以上経ち、は、共通語化の波にのまれ、消えたことが予想される(未確認)はさらに、広まり定着している。しかし、収録当時としては「ふつうはしづかにという」「シチョルの転」のように注記しているところから、臨時的バリエーションであったと思われる。この他の臨時的バリエーションについてはなお、調査・整理中である。

(3) 場面設定におけるアスペクト表現について 研究分担者、二階堂整が次の研究成果を得た。

西日本方言では、アスペクト表現に「ヨル・トル」の2区分がある。最近はこの対立がゆらぎ、「ヨル」の領域へ「トル」が侵入しているとされる(工藤真由美2001)。しかし、アスペクトの調査自体が容易ではなく、そのため、そのゆらぎもどこまであきらかなのかは、疑問の残る点である。場面設定によ

る談話調査により、現代のアスペクトの状況を明らかにした。2009-2013年度の大分県・福岡県での場面設定による談話調査では、まさに、今、目の前で起こっている事態・進行相をとらえた表現が得られた。例えば、中学生の店番の場面で、A「あれ、Bくん、何しヨル？」B「今、お母さんが出かけチョルけん、店番しヨル」という会話が聞かれた。わずか1、2分の会話であるが、中学生においてもヨル形(しかも現在形)がよく使用されていることがわかる。今回の調査からは、「ヨル、トル」の対立のゆらぎは見出しがたかった。ただし、中学生においては否定形では「テナイ」形が増えている。

二階堂 2006 では、福岡市の約1時間の談話調査を実施し、アスペクトの使用実態を見た。青年女子、中年女子とも「ヨル・トル」がほぼ同数出現し、工藤 2001 の調査項目の内省による調査とは異なる結果が現れ、対立が失われているか、疑問が残った。また、話題は昔話場面が多く、ヨル形も「ヨッタ」という過去形が多くを占め、実際の進行相をヨル形で表現しているかどうかを判断し難かった。

今回の場面設定の談話の調査では「ヨル形」(現在形)がよく使用されていることが明らかになり、また、否定形の「テナイ」が中学生で多く用いられていることは、二階堂 2006 の調査結果と一致することも分かった。また、この形は本研究で注目する「共通語には変わらない変容」の一例である。

アスペクトの調査は、このような、場面設定をした上で、より「ヨル」形が出やすい状況での調査が必要であることが分かった。

(4)大分県方言談話における二人称代名詞「アンタ」のイントネーションと機能について、研究分担者松田美香が次の研究成果を得た。

大分県方言談話中に、名詞・句・節の後に盛んに挟まれる「アンタ」が観察される。この「アンタ」は発話継続中では非下降イントネーションが、発話終結部では下降イントネーションが観察される。「アンタ」は当該方言で実質的な二人称代名詞としての機能も持っているが、この「アンタ」は、命題に関係しないことで区別される。命題に関係のない「アンタ」は「呼びかけ」というプロトタイプ的機能を持ち、文中・文末イントネーションと結びついて、「発話権保持」と「念押し」の二つの機能に分化したのではないかと考えられる。

引用文献

工藤真由美 2001 科研報告書『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究 2』

杉村孝夫 2014 依頼の場面の談話分析(2)-大分県方言第2次調査資料による-、福岡教育大学紀要、第63号第一分冊

二階堂整 2006 談話資料からみた福岡市方言のアスペクトの実態、『語文研究』100-101号、九州大学国語国文学会

二階堂整 2015 談話調査の有効性-場面設定におけるアスペクト表現-、日本方言研究会ポスター発表『日本方言研究会第100回研究発表会発表原稿集』pp.85-88

ポリリー・ザトラウスキー 2009、英語と日本語の依頼表現の比較対照、『日本語表現学を学ぶ人のために』世界思想社

松田正義・日高貢一郎 1993『方言生活30年の変容』下巻、桜楓社

松田美香 2015 大分県方言談話における二人称代名詞「アンタ」のイントネーションと機能、日本方言研究会ポスター発表

『日本方言研究会第100回研究発表会発表原稿集』pp.89-92

柳慧政 2012『依頼談話の日韓照研究』笠間書院

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

杉村孝夫、依頼談話の分析-大分県方言60年の変容-、福岡教育大学紀要、査読なし、64号第一分冊、2015、15-31

松田美香、大分の方言について、査読なし、別府史談、28号、2015、70-81

松田美香、大分都首都圏の依頼談話比較-大分方言の「アンタ」「オマエ」のフィラー的使用-、別府大学紀要、査読有、56号、2015、13-20

松田美香、ペア入れ替え式ロールプレイ会話：場面2「依頼談話」、国立国語研究所共同研究報告『方言談話の地域里世代差に関する研究成果報告書』、査読なし、13-04、2014、24-40

杉村孝夫、依頼の場面の談話分析(2)-大分県方言第2次調査資料による-、福岡教育大学紀要、査読なし、第63号第一分冊、2014、29-62

<https://libopac.fukuoka-edu.ac.jp/dspace/.../1/1004-Sugimura-2014.pdf>

松田美香、昔話の語り記録における大分方言の可能表現(研究ノート)、別府大学紀要、査読なし、第55号、2014、217-227

杉村孝夫、依頼の場面の談話分析-大分県方言談話資料による-、福岡教育大学紀要、査読なし、第62号第一分冊、2013、33-54

<https://libopac.fukuoka-edu.ac.jp/dspace/handle/10780/1444>

杉村孝夫・宅島玲沙、方言研究の一方としてのオーラルヒストリー-、福岡教育大学国語化研究論集、査読なし、54号、2013、82-65

日高貢一郎、「豊日方言」の研究課題、
国語の研究、査読なし、38号、2013、
1-9

〔学会発表〕(計10件)

杉村孝夫、依頼談話の世代差・実時間
経年差-大分県方言60年の3世代実時
間経年資料を中心として-、日本語学会
春季大会口頭発表、兵庫県西宮市、関
西学院大学上ヶ原キャンパスB号館、
2015年5月23日

松田美香、大分県方言談話における二
人称代名詞「アンタ」のイントネーシ
ョンと機能、日本方言研究会ポスター
発表、兵庫県神戸市東灘区、甲南大学
甲友会館、2015年5月22日

二階堂整、談話調査の有効性-場面設定
におけるアスペクト表現-、日本方言研
究会ポスター発表、兵庫県神戸市東灘
区、甲南大学甲友会館、2015年5月22
日

松田美香、大分の方言～九州・瀬戸内
各県との比較による～、もっと知ろう
大分・杵築の歴史教室、大分県杵築市
杵築中央公民館、2014年10月15日

松田美香、大分の方言～九州・瀬戸内
各県との比較による～、敷戸後年大学
「教養講座」、大分県大分市敷戸校区公
民館、2014年9月17日

松田美香、首都圏と大分談話の比較分
析-地域差・世代差・性差-、社会言語
科学会 ワークショップ「方言ロール
プレイ会話による方言談話対照研究の
試み-地域差・世代差・性差・メディア
差に注目して-」、大分県別府市、立命
館アジア太平洋大学、2014年9月13
日

松田美香、大分の方言、別府史談会総
会記念講演(招待講演)大分県別府市
中央公民館、2014年9月6日

杉村孝夫、方言研究の一方法としての
オーラルヒストリーの試み、九州方言
研究会第34回研究発表会、大分県玖珠
郡九重町、九重共同研修所、2012年9
月2日

松田美香、大分の可能表現-古くて新し
い可能動詞形-、九州方言研究会第34
回研究発表会、大分県玖珠郡九重町、
九重共同研修所、2012年9月2日

杉村孝夫、依頼の場面の談話分析、筑
紫日本語研究会243回研究発表会、大
分県玖珠郡九重町、九重共同研修所、
2012年8月10日

〔図書〕(計4件)

- 松田美香編著、森田イリエ、安藤絹、
山月美江子、100歳イリエおばあち
ゃんの知恵袋-伝えたい大分の方
言・ことわざ・レシピ-、「私家版」
県、2013、117頁

— 杉村孝夫、日高貢一郎、二階堂整、
松田美香、福岡県方言談話資料(1)
豊前市(下河内を中心に)「科学研究
成果報告書」、2013、66頁

— 杉村孝夫、日高貢一郎、二階堂整、
松田美香、福岡県方言談話資料(2)
うきは市吉井町、「科学研究成果報告
書」、2013、79頁

— 杉村孝夫、日高貢一郎、二階堂整、
松田美香、福岡県方言談話資料(1)
(3)福岡市(博多区を中心に)「科研
研究成果報告書」、2013、102頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉村 孝夫(SUGIMURA Takao)福岡教育大
学・教育学部・教授 研究者番号:60083234

(2)研究分担者

日高 貢一郎(HIDAKA Kouichirou)大分大
学・教育福祉科学部・教授 研究者番号:
30136767

二階堂 整(NIKAIIDOU Hitoshi)福岡女学院
大学・人文学部・教授 研究者番号:
60221470

松田 美香(MATSUDA Mika)別府大学・文学
部・教授 研究者番号:00300492